

子どもを育てるといふこと

信時哲郎

子どもがすすく育っていくこと……誰に聞くまでもなく、それはありがたいこと、望ましいことに決まっている。が、二人の子どもの父親となった今、子どもを育てるとはどのようなことなんだろうか、ふとそう思っ立ち止まってしまふことがある。

こんなことがあった。

三歳ほどであった娘とテレビを見ていると、ちょうどモグラの生態を紹介する番組をやっていた。娘は突然「モグラねえ、本で見たことあるよ」と言ったかと思つと、本棚に走つていった。わが娘もずいぶんたくましくなつてきたものだ、などと感慨にふけつていて、果たして娘は『昆虫図鑑』を手にしてテレビの前に戻つてきたではないか。ああ……

「これはねえ、虫がいっぱい出てる」本だから、モグラは出てこないんじゃないかなあ。」

「これだよ。この中にモグラいたもん。」
「らちがあかないので、娘と一緒に『昆虫図鑑』

を眺めることにした。

「ほらね、ここにいるのはき、カブトムシとか、チョウチョとか、玲子の好きなテントウムシとか、そういうのばかりでしょ。」

「でも、ここにモグラいるよ。」

娘が開いたページには、土の中のアリの巣の様子が描かれていた。と、なんとその見開きページのはじめに、アリの巣に向かつて穴を掘り進めているモグラの姿があったではないか！

子どもを育てるといふことは、例えば『昆虫図鑑』の中には、昆虫に関するさまざまな情報が蓄積されている」と教えることである。しかし、それは『昆虫図鑑』の中にはモグラの絵など書かれてはいない」という偏見を押し付けるものでもある。この社会でヒトとして生きていくために教育が欠かせないというのはもちろんだが、それは大人たちの偏見や限界を、子どもにそのまま植え付けることでもある。子どもたちが生来もっている無限の能力・感性を矯めて、それを消し去っていくことが教育なのであるとすれば、なんと皮肉なことだろう。

しかし、幸いなことに（！）教育は万能ではない。一を教えただけで十を知る子もいるというが、一度注意したことを、何回たつても改めないでいる子もいる。何度同じことを言えばわかるんだろう……子どもといると、情けない思いをさせられることが本当によくあるのだが、考え方を変えてみれば、これは子どもの無限の能力・感性が大人社会に抵抗を試みているのだと解釈できないこともない。だとすれば、一を聞いても〇・三ほどにしか理解しないうちの子は、ひよつとしたら並々ならぬ能力と感性に恵まれているということになるのかもしれない！ もっとも、それが将来、何をもたらしてくれるのか、全くもって心もとない限りではあるのだけれど……

日本近現代の文学とその周辺について考えています。関東から関西に移って十年あまり経ちますが、娘が関西弁のネイティブ・スピーカーとして育ちつつあるので、我が家の言語体系も変更を余儀なくされています。

